

特定非営利活動法人グラウンドワーク三島 活動説明資料

地域力・市民力を結集して「水の都・三島」の元気を再生

～右手にスコップ・左手に缶ビールが合言葉！ 住民発意で清流の街の宝物と元気を再生～

特定非営利活動法人 グラウンドワーク三島

理事長 小松 幸子

1 三島市の概要

伊豆・箱根・富士の玄関口に位置する静岡県三島市は、律令時代には伊豆国の国府が置かれ、平安時代には三嶋大社の門前町として、江戸時代に東海道の宿場町として栄えた。市内には、奈良平安時代からと伝わる寺院や神社、江戸時代から残る「八小路」などの路地、看板建築と呼ばれる昭和初期の建造物等、数多くの歴史的資源が現存している。箱根峠から西側の三島市内にかけての箱根旧街道は国史跡に指定されており、街道には石畳や山中城跡、一里塚が整備され、多くのハイキング客で賑わっている。箱根西麓（箱根連峰の静岡県側）は関東ローム層により根菜類等の野菜の栽培に適し、生産された馬鈴薯や人参、大根などは、高級野菜として首都圏で人気が高まっている。

また、三島市は昔より、「水の都」と呼ばれ、富士山からの地下水が街中に湧き出す、湧水網都市といえる。中心市街地には、小浜池や源兵衛川、桜川、御殿川、四ノ宮川、蓮沼川など、富士山の地下水系に属する湧水池や河川が網の目のように点在し、美しい水辺自然環境と空間を形成している。

2 グラウンドワークによる環境再生への取り組み

しかしながら、昭和 30（1955）年代初頭の上流地域での都市化・工業化の進展や生活環境の変化に伴い、「水の都・三島」の水辺自然環境の悪化が進行し、特に、市内最大の湧水河川である源兵衛川には、ゴミが捨てられ、生活雑排水も流入し、悪臭を放つ醜く汚れた川になってしまった。

そこで、ふるさとの原風景・原体験を取り戻そうと多くの三島市民が立ち上がり、「水の都・三島」の水辺自然環境の再生と復活を目指して、英国で始まったグラウンドワークを日本で最初に導入すべく、平成 4（1992）年 9 月に「グラウンドワーク三島」が結成され、市民内発型の活動が開始された。

グラウンドワークは、1980 年代の初頭に英国で始まった、市民・NPO・企業・行政が協力しあい身近な環境改善活動に取り組む実践的な活動であり、それらの協働による環境活動を通して、持続可能な地域コミュニティを構築することを目的としている。グラウンドワーク三島は、現在までの 20 年間にわたり、多様な環境改善活動を積み重ねてきている。



源兵衛川で遊ぶ子ども



蓮沼川（宮さんの川）の桜と水車

(1) グラウンドワーク三島の先進性・革新性

- ・ 市民・NPO・企業・行政とのパートナーシップによる実践的・持続的な活動をととして、「水の都・三島」の原風景を劇的に再生・復活させた。
- ・ 活動をコーディネートするNPO法人グラウンドワーク三島は、わが国で初めて英国発祥の環境改善活動であるグラウンドワークを導入し、その有益性と先験性を多彩な市民活動の実践により実証している。
- ・ 行政や企業では対応できない生活者の視点に立った現場主義的なきめの細かい多面的な市民公協事業に挑戦している。
- ・ 市民参加によるビオトープ公園整備事業から環境コミュニティ・ビジネスに至るまで幅広い事業を展開し、我が国の環境まちづくりNPOの先進的な運営モデルを示している。
- ・ これらの取り組みにより地域に多くの観光客や視察者を迎えることとなり、環境の再生が地域（経済）の再生へと発展した先進的な地域づくりのモデルを示している。
- ・ 地域で活動する20以上の市民団体が連帯するとともに、シニア世代、女性グループ、若者等の参加など、活動には多くの人々が関わるしくみが内包され、それぞれのもつ資源・志源が有効に活用されている。
- ・ 欧米やアジアなどの海外の環境団体、まちづくり団体との技術交流や人材交流など、地域の草の根の活動をベースとしながらも、グローバルな活動を展開している。

(2) グラウンドワーク三島の多様な実践事例

◆環境が悪化し汚れた源兵衛川の水辺を再生し、観光資源として活用



湧水が豊富な源兵衛川(昭和30年代)



汚れた源兵衛川(昭和35年～平成元年)



環境再生された源兵衛川

◆「右手にスコップ・左手に缶ビール」による実践的な環境改善活動によって観光スポットに変身



源兵衛川でのちゃんかけ拾い



宮さんの川(蓮沼川)・ほたるの里



市民インストラクターの研修(雷井戸)

◆**市民ボランティアの支援によるインストラクターが街の案内役として活躍**



境川・清住緑地の田植え



自然観察会(松毛川)



エコ・スタディ・ツアー

◆**商店主、農業者、大学生、若者、シニア、女性との協働による取組みの展開**

地域の未活用の人的資源（シニアなど）や環境資源（耕作放棄地や荒廃里山の間伐材・青竹など）を活用した「環境コミュニティ・ビジネス」を実施している。



三島門前屋台村販売会



「三島そば」の栽培



「竹あかり」イベント

◆**地域資源、環境資源の再生による地域文化の再興**



エコ周遊カー(ペロタクシー)



「せせらぎシニア元気工房」のものづくり作業



腰切不動尊大祭

◆**国内外の視察者などとのまちづくり交流による新たな観光開発の可能性を実証**



観光スポットになった三島梅花藻の里



日韓バイクモ交流



日英グラウンドワーク交流

◆若者とシニア等の人材育成を展開：「グリーン・ジョブ（環境まちづくり）研修」、「グラウンドワーク農楽校」、「エコ、リバー、富士山湧水、境川・清住緑地インストラクター養成講座」の開校

市民インストラクター延べ 400 人を育成し、地域の環境改善活動や市内小中学校へ派遣した「環境出前講座」の開校（延べ 2,500 人）、「エコ・スタディ・ツアー」の案内役などで活躍



「グラウンドワーク農楽校」の開校
（源兵衛川の堆積土砂・外来種の
除去作業）



市内 14 小学校・7 中学校での
「環境出前講座」の開校
（源兵衛川の生き物さがし）



「エコ・スタディ・ツアー」の開催
（市内の湧水池や実践地の案内）

◆富士山周辺のインターネットによる世界的情報発信や湧水保全活動の展開

育成した富士山湧水インストラクターによる、富士山周辺の湧水池調査とインターネットによる情報発信や、樹海や原生林のエコ・スタディ・ツアーを実施し、富士山の世界文化遺産登録への条件整備を推進



富士山湧水インストラクターによる
富士山麓の湧水池調査



インターネットによる富士山の
湧水池情報の発信
（富士山湧水マップ）



富士山湧水インストラクターの案内
による青木ヶ原樹海や原生林の
エコ・スタディ・ツアー

（3）活動の概要

かつて「水の都」と呼ばれた三島市は、1960 年代、産業活動の活発化に伴う地下水の汲み上げによって湧水が減少し、市内を流れる川は汚れ、ドブ川となってしまった。このふるさとの環境悪化に問題意識をもった市内 8 つの市民団体は、水辺自然環境の再生と復活を目指して、平成 4（1992）年 6 月に「グラウンドワーク三島実行委員会」を発足させ、全国に先駆けて市民・NPO・企業・行政のパートナーシップによる環境改善活動であるグラウンドワークの手法を導入した。活動の大きな契機となったのは、市内中心部を流れる源兵衛川（農業用水路）の環境再生活動である。地域住民の意見をもとに、グラウンドワーク三島が関係者相互の調整役となり、源兵衛川の水辺環境の再生に努力した。事業終了後も地域住民の協力によって水辺環境を守り育てる地道な活動が続けられ、今では蛍が乱舞する自然度の高い川に変貌した。

これをきっかけに多様な自然環境保全活動や環境教育活動、環境コミュニティ・ビジネス等の多様な活動が実施され、持続可能な地域環境づくりとコミュニティの再生が進められている。

3 地域力・市民力の結集によって清流の街がよみがえった

グラウンドワーク三島によってコーディネートされたパートナーシップによる環境改善活動をととして、今では多くの市民が憩う親水空間が整備され、ホタルやカワセミなど生息する豊かな水辺自然環境が再生・復活した。グラウンドワーク三島では、これまでに、源兵衛川などの水辺再生をはじめとして、絶滅した水中花ミシマバイカモの復活、ホタルの里づくり、住民参加による遊水池の整備、歴史的な井戸・水神さん・湧水池の再生、お祭りの復活など、水辺にまつわる環境文化の再生活動を展開してきている。また、活動の初期段階より、荒地の再生を図るため市民手作りによる公園整備を数地区で実施しており、身近な環境改善をスローガンとするグラウンドワーク活動の典型的な事業となっている。さらに、環境教育活動の一環として「鎮守の森探検隊」による環境観察会の実施や学校ビオトープの整備も推進し、保育園から高校まで、多くの子ども・若者たちの参加を得て活発な活動が行われている。

これらの事業の推進にあたっては、地域学習会やワークショップの開催等を通じて関係者の合意形成に多くの時間をかけ、地域住民が主体的に身近な環境を守り・育てる体制となるよう促している。現在、当団体は20の市民団体（構成約6,000人）、150人以上の個人会員からなり、企業200社、三島市、地域ボランティア（延べ40,000人）等が参画し、それぞれのネットワークを活かした創造的な活動を多方面で展開し、これまでに三島市内及びその周辺地域において50地区以上で具体的な実践活動を展開している。

これらの活動は、「右手にスコップ、左手に缶ビール」という明快で楽しいスローガンのもと、地域の多くの人々の実践的な参加により進められている。身近な生活環境の中で発生した地域課題に対して傍観者ではなく、積極的、具体的な形で取組み、小さな成果を残すことで市民に自信を取り戻し、街への愛着の気持ちを醸成する「自立と自発への心の変革運動」といえ、「議論よりもアクション」「走りながら考える」が行動指針・規範である。



腰切不動尊井戸の再生



雷井戸の整備



源兵衛川でのホタルの乱舞

4 「ふるさとの川と森」の生物多様性の保全に向けた取組み

清流がよみがえった源兵衛川では、平成19年12月、中流部から生コンクリートが流出し、清流のシンボルであるホトケドジョウ（静岡県レッドデータブック絶滅危惧1A類／東部地域）をはじめ、多くの魚類・水生生物が死滅する、甚大な環境被害が発生した。この事態を受けて、グラウンドワーク三島では、生態系専門家との協働による環境モニタリング調査や、ホトケドジョウの生息環境再生を目指したワンデイチャレンジ作業を5年間継続して実施しており、「多自然型の川づくり」に向けて、継続的・発展的に取り組んでいる。

また、源兵衛川の環境再生の経過を実体験していない子どもたちに、生態系の貴重性や水文化、持続的な環境改善活動や市民活動の役割などを理解してもらうために、三島市教育委員会等と連携して、子どもや教職員などを対象とした「源兵衛川環境出前講座」を開講している。さらに、市民による「源兵衛川エコレンジャー」も育成するなど、地域総参加で源兵衛川の生物多様性を守り育てる体制づくりを進めている。

また、三島市の南端、沼津市との境界には、狩野川流域に唯一残された旧河川敷で、三日月形の「止水域」であり、県内はもちろん全国的にもたいへん貴重な水辺自然環境である「松毛川」が位置している。両岸には、狩野川の本風景である、エノキ・ムクノキ・ケヤキなどの巨木による「河畔林」が奇跡的に残存しているが倒木等の環境悪化が進行している。

グラウンドワーク三島では、2003 年から、「ふるさとの森」の復活を目指し、松毛川周辺の御園・松本・長伏地区の住民・自治会、中郷用水土地改良区の農家、三島市・沼津市の行政、近隣する長伏小学校や中郷西中学校、関係 P T A、隣接する工業団地内の関係者等と広範に連携しながら、自然観察会や環境整備活動、植林活動などの河畔林保全活動や、「松毛川エコレンジャー」等の人材育成を進めている。これまでに、松毛川両岸約 2ha に、潜在自然植生から選定した苗木 15 種・3,000 本以上を植林している。また、地域住民により、愛護組織「松毛三日月会」が設立され、「千年の森づくりトラスト運動」を本格化させている。

今後も、「ふるさとの森づくり」と「原風景・原自然の再生」を目指して、松毛川右岸（三島市御園側）において、約 2ha の植林地を確保し、5 年間で 10 万本の植林を目標に、新たな森づくりに取り組む。



源兵衛川生息環境再生ワンドイチャレンジ



狩野川の本風景・河畔林が残る松毛川



松毛川河畔の植林活動

5 環境再生から地域再生・地域振興・商店街振興に挑戦

これら市民・企業・NPO・行政の協働によるグラウンドワーク活動により、景観形成と回遊性の向上や商業地域を中心とする景観整備がすすみ、平成 17 年度都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」、平成 18 年第 7 回「明日への環境賞」（朝日新聞社）、平成 21 年地球環境大賞「環境地域貢献賞」（フジサンケイグループ）、さらに、平成 22 年度第 1 回地域再生大賞「大賞」（共同通信社・地方新聞 46 社）を受賞するなど、「水の都・三島」の代表的な原風景として認知されている。

また、源兵衛川や三島梅花藻の里などの水辺散策に訪れる来街者や街歩きの観光客が近年着実に増加しており、観光案内所に置いてある観光案内の「みしまっぷ」の発行枚数は、平成 10 年の 4.7 万部から、近年では 45 万部までになっている。さらに、空き店舗が多かった中心商店街にもお客様が戻り、飲食店を中心に来客数も増加し、空き店舗がほとんど見られなくなっている。水辺の環境再生から始まった活動は、「潤いのあるまちづくりからうまいおいのある街づくり」へと地域振興の方向に拡大している。

現在、グラウンドワーク三島では、新たに路地裏文化の再生や街と農業を結ぶ連携と交流づくり等の新たな市民事業やコミュニティ・ビジネスへの取り組みを始めている。具体的には、「三島湧水マップ」を発行して、「水の都・三島」の裏町水文化を情報発信したり、うなぎによる食文化の再興や箱根西麓での大根や馬鈴薯、「三島そば」などの地場産品の開発にも、地域農業者と協働して取り組んでいる。

6 多様な地域文化の発掘・再生への取り組み

歴史と文化の街・三島には、まだまだ未発掘の観光資源、環境資源、地域資源が眠っている。グラウンドワーク三島では、店主や農業者、大学生、若者、NPO、青年会議所、商工会議所青年部などとの協働組織を結成して、下記のような、三島の魅力再発見の地域文化再生ルネッサンス事業に取り組んでいる。

(1)「三島そば」栽培による食育・地域ブランドの展開

箱根西麓に点在する遊休農地を利活用し、かつて栽培されていた「三島そば」を復活させるために、平成16年から事業を始めている。市民ボランティアによる「そばづくり隊」を組織し、そば栽培を展開している。収穫したそばは、箱根西麓産の地域ブランド「三島そば」として販売しており、現在、販路開拓の強化を進めている。



「三島そば」の種まき作業



「三島そば」の収穫作業



「三島そば」そば打ち教室

(2) リサイクル屋台村や竹あかりイベント等による中心市街地のにぎわい再生活動

間伐材や廃リヤカーを利活用した手桶やリサイクル屋台3基による打ち水イベント、三島門前屋台村イベントや、放置竹林の青竹の側面に透かし彫りを入れた「竹あかり」を市内のせせらぎ沿いで灯したあかりイベントを開催している。



打ち水イベント



三島門前屋台村販売会



竹あかりイベント

(3) 地域文化の再生をコンセプトにした創造的なまちづくり事業への取組み

グラウンドワーク三島によるこれまでの活動成果をベースとして、三島に訪れた人々に、三島の水辺自然環境やまちづくり等を説明・案内することのできる「エコインストラクター」、「リバーインストラクター」、「富士山湧水インストラクター」、「境川・清住緑地インストラクター」（延べ400人）を養成し、彼らが案内役になった、地域資源を活用した環境・まちづくり体験研修ツアー「エコ・スタディ・ツアー」を実施している。これまでに、源兵衛川の水辺ゴミ拾いツアーや「ちゃんかけ（茶碗の欠片）拾いツアー」等を企画してきたが、清流の中に入ったゴミ拾いは、参加者の評価も高く、終了後における地域住民や環境NPOメンバーとの「水談義」は、冷たいビールの味もひときわ美味しく、多くのリピーターが参加してくれている。特に、昼食の流しそうめんやうなぎ弁当は好評である。

平成18年度は国土交通省より「社会実験」を受託した。水辺環境が再生された川辺や湧水池の沿道や路地空間の散策コースを創出し、新たな観光客の誘致と観光スポットの構築を進めることを目的に、エコ周遊カー（ペロタクシー）の運行実験と大通り商店街のランジット・モール化実験、中心商店街の沿道空間（歩道等）における緑陰空間の創出や、数台のリサイクル屋台を活用した集客イベントを開催し、様々な市民組織と

の協働による、街のにぎわいの創出と魅力のある歩行者空間の創出を図った。

平成 19 年度は国土交通省より「まちめぐりナビプロジェクト（まちナビ）」を受託し、せせらぎの街・三島が持つ、美しい水辺自然環境の魅力や新鮮な地域情報、隠れた文化・歴史情報、食文化情報、NPO 実践情報などをわかりやすく容易に案内できる観光情報システム「せせらぎの街・三島ぐるっとエコツアーナビ」事業に取り組み、市内の散策のサポート、三島の情報発信の強化を進めた。

平成 20 年度は国土交通省より「ニューツーリズム創出・流通促進事業」を受託した。「富士山湧水インストラクター」が案内役となって、富士山東麓と南麓の湧水の現場を訪ね、ちゃんかけ拾いを体験する「水の山・富士山 幻の湧水・環境保全活動体験ツアー」を実施し、参加者に富士山からの湧水の重要性や貴重性、文化性、歴史性を確認してもらい、湧水の保全活動への理解と強化に発展させていくとともに、未開発の地域資源の新たな観光資源としての活用策を探った。

平成 21 年度は内閣府から「地方の元気再生事業」を受託し、三島市が備える豊富な地域資源を最大限に活かし、「グリーン・ジョブ（環境まちづくり）」分野の担い手となるシニアと若者を養成するための研修プログラムの開発とともに、人材育成・交流拠点として、街中の空き店舗を再生利用した「三島街中カフェ」と、箱根西麓の農村地域の古民家を再生利用した「三島農村カフェ」を開設し、にぎわい再生に取り組んだ。



ちゃんかけ拾いツアー（源兵衛川）



スケッチツアー（三嶋大社）



三島街中カフェ

(4) 環境と観光の共生による交流人口の増加

これらの活動が、各方面から大きな関心を呼び、現在では、年間約 2,000 人・約 100 団体が国内のみならず海外からも、グラウンドワーク三島の視察に訪れるなど、日本におけるパートナーシップ型の環境・まちづくり活動の成功現場を情報発信する役割を担っている。年齢層も、大学生のインターンシップ研修生などの若者からシニアまで、幅広い年代の交流の場にもなっている。

また、三島を拠点に国際的なグラウンドワークのネットワークを構築しており、英国のグラウンドワークトラストとは提携協定が締結されている。さらに、韓国とは、2004 年 5 月に、韓国江華島でバイカモの保護活動を進めている「韓国ナショナルトラスト江華バイカモ保護委員会」と環境交流協定を締結し、2007 年 2 月には、全国各地でバイカモ保護に取り組む環境団体と韓国ナショナルトラストメンバーが一同に会した「バイカモ国際サミット」を開催した。2008 年からは、日韓の小学生・大学生の若者環境交流を実施するなど、国内外における「バイカモ保護ネットワーク」が拡大している。この「日韓バイカモ環境交流」が評価され、2010 年 10 月には、グラウンドワーク三島と韓国ナショナルトラストは、毎日新聞社・朝鮮日報社第 16 回「日韓国際環境賞」を同時に受賞した。

また、韓国・済州島とは、2008 年から環境・平和市民交流に取り組み、スタディーツアーを実施するなど、まちづくり活動の先進性がベースになり、国内外に観光情報として新たな発信力を高めつつある。



韓国ナショナルトラスト来訪



日韓バイカモ環境交流



韓国江華島のバイカモ保全水田

(5) 次世代の人材育成

地域の子どもや市民などを対象とした、源兵衛川や松毛川などにおける自然観察会の開催、学校ビオトープの整備、小中学校における「環境出前講座」の実施などを通して、次世代の人材育成にも力を入れている。

また、これまでにグラウンドワーク三島が取り組んできた、市民・NPO・企業・行政とのパートナーシップをとおして創り上げてきた実践的な環境教育、環境再生、地域再生、農業再生、コミュニティ・ビジネスなどの、多様な「現場モデル」を、「全国モデル」として普及・発展させるための人材育成も進めている。

平成 22～23 年度は、内閣府「地域社会雇用創造事業」の一環として、グラウンドワーク三島の多様な現場モデルを教材として活用して、具体的に地域協働を推進することのできるマネジメント力を有する人材育成を行う「インターンシップ事業」と、農村漁村や衰退地において、地域資源を活用した地元密着型の「小さな産業」を創出し、人と経済の元気を主導・誘発できるビジネス力を有する起業家を育成する「インキュベーション事業」に取り組み、2,522 人の人材と 109 人の起業家育成を行った。本事業は、全国的に高い評価を受け、参加者の就業力・起業力・課題解決力の育成に貢献し、地方で活躍するNPOの組織・活動強化に多大な影響を及ぼしている。

平成 24 年度は、宮城県石巻市に開設した東北事務所を拠点として、被災地において、内閣府「復興支援型地域社会雇用創造事業」を実施し、「インターンシップ事業」では 150 人の人材育成、「インキュベーション事業」では 50 人の起業家育成を進める。

(6) 活動の成果

- ・ 行政が対応に苦慮していた地域の環境悪化が、グラウンドワーク三島がコーディネートするパートナーシップによるマネジメント力により劇的に改善され、源兵衛川をはじめ街中に清流がよみがえった。
- ・ 地域住民等がまちづくりのプロセスに主体的に関わることによって、地域住民等の街に対する問題意識と愛着心が向上し、行政費の節約や地域企業の具体的な社会参加も実現した。また、市民・NPO・企業・行政がパートナーシップを組んで自立的にまちづくりに関わる、身近でわかりやすい実証的なモデルケースを提示することができ、地域社会に変革をもたらす新しい社会システムが、グラウンドワーク活動を通じて根付き始めた。
- ・ 水辺環境の再生から始まった活動は、「潤いのあるまちづくりからうおいのある街づくりへ」と地域の振興に拡大している。特に、源兵衛川や三島梅花藻の里など、水辺の散策に訪れる来街者やまち歩きの観光客が、近年着実に増加しており、観光案内所に置いてある観光案内の「みしまっぷ」の発行枚数は、1998 年の 4.7 万部から、近年では 45 万部までに増加している。さらに、空き店舗が多かった中心商店街にも、お客様が戻り、飲食店を中心に来客数も増加し、空き店舗がほとんど見られなくなっている。
- ・ これらグラウンドワークによる多様なまちづくり活動は各方面から大きな関心を呼び、現在では、年間約 2,000 人・約 100 団体が国内外から視察に訪れるなど、日本におけるパートナーシップ型の環境・まちづ

くり活動の成功現場を情報発信する役割を担っている。

7 東日本大震災支援活動「子どもを元気に富士山プロジェクト」

未曾有の被害を出した東日本大震災の被災児童・家族を対象に、「心の支援・ケア」を重点に置いた支援活動「子どもを元気に富士山プロジェクト」を立ち上げた。「子どもを元気に富士山支援募金」を設けて、三島駅前を中心にした街頭募金活動を20回以上実施すると共に、市内外の店舗や企業の協力を得て、50箇所以上に募金箱を設置し、約1,400万円の寄付をいただいている。

支援活動としては、被災児童や親子延べ1,092人を対象に、三島の水辺と伊豆の温泉に招待する「心を元気にするショートツアー」や、先生役ボランティアによる「大学生出前寺子屋教室・合宿」を開校した。

参加者からは、「富士山を間近で見ることができ、復興へ向けての希望と勇気をもらった」、「原発被害を避けるために、屋外で遊ぶことができない子どもたちが、三島・伊豆の水辺自然環境で思い切り遊べたことで、本来の子どもらしさを取り戻せた」などと非常に高い評価をいただいている。

(1)「心を元気にするショートツアー」(平成23年4月～)

宮城県石巻市や福島県いわき市などを中心に、避難所や仮設住宅での生活を余儀なくされている被災児童・親子を、これまでに12回、593人を三島・伊豆にご招待し、三島の水辺散策や生物観察など自然に触れいただき、伊豆の温泉でゆっくりと過ごしていただくツアーを開催している。参加者の子どもたちの所属に応じて、伊豆のスポーツ少年団とのサッカー交流試合を開催したり、御殿場市・三島市・沼津市の少年少女合唱団とのチャリティーコンサートを開催するなど、多方面からの「心のケア」を行っている。

震災から1年以上が経過した現在、避難所はほぼなくなったが、ひきこもりやいじめの増加、精神疾患やパニック症候群の懸念など、潜在的な形で子どもたちの心への悪影響が心配されている。

今後も、被災地から離れた、平常的な生活環境の中で自然体験や温泉体験を通しての持続的な「心のケア」を行うショートツアーはもちろん、スポーツ交流・文化交流などの面でも子どもたちに『元気と笑顔』を取り戻してもらうために継続していきたい。

(2)「大学生出前寺子屋教室」(平成23年6月)

宮城県石巻市と福島県いわき市において、各2日間開催した。大学生などの先生役ボランティア延べ100人を現地に派遣して、子どもたち延べ110人への、マンツーマンの学習支援活動を実施した。

子どもたちからは、「分からなかったことが分かった!」、「すごく分かりやすかった」などの感想がきかれた。また、勉強だけでなく、遊びの時間も充実していたようだ。

(3)「富士山に登って元気になるツアー」、「大学生出前寺子屋合宿」(合同企画)(平成23年8月)

石巻市・いわき市の子ども61人と保護者合わせて88人を、静岡県東部にご招待した。ほぼマンツーマンの寺子屋合宿は、子どもたちから「楽しく・わかりやすく勉強できた」と好評を得た。また、今年は諦めていたプール遊びができてうれしかったと喜んでいて、富士登山では、天候が悪かったにもかかわらず、子どもたちはもちろん保護者の方たちも「一生の思い出」「今度は山頂まで登ってみたい」と、感動したようだ。



源兵衛川で生き物探し



伊豆のスポーツ少年団とサッカー交流



先生役ボランティアとお勉強



思いっきり遊ぶ！（サイクルスポーツセンター）



久しぶりのプール遊び



富士登山に挑戦！

【主な受賞歴】

年月日	代表表彰者	表彰名
1996年3月	自治省	平成7年度「地域づくり団体自治大臣賞」
1997年11月	自治省	地方自治施行50周年記念「地方自治功労者自治大臣賞」
1997年11月	日本建築家協会	東海支部設立10周年記念大会「JIA 静岡会長賞」
2001年6月	国際ソロプチミスト	駿河クラブ賞「環境貢献賞」
2001年12月	(社)中部建設協会	第2回中部の未来創造大賞「国土マネジメント部門優秀賞」
2002年11月	美しいしずおか景観推進協議会 (静岡県ほか)	平成14年(第15回)静岡県都市景観賞 まちづくり部門「優秀賞」
2005年6月	(社)土木学会景観・デザイン委員会	デザイン賞2004「最優秀賞」
2005年10月	「都市景観の日」実行委員会 (国土交通省、経済同友会ほか)	平成17年度都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」
2004年10月	NP0 法人ユニバーサル社会工学研究会	水辺のユニバーサルデザイン大賞2004「大賞」
2005年11月	美しいしずおか景観推進協議会 (静岡県ほか)	平成17年(第18回)静岡県都市景観賞 まちづくり活動部門「優秀賞」
2006年10月	(財)あしたの日本を創る協会	平成18年度あしたのまち・くらしづくり活動賞 「内閣総理大臣賞」
2006年4月	朝日新聞社	第7回「明日への環境賞」
2009年4月	フジサンケイグループ	第18回地球環境大賞「環境地域貢献賞」
2010年10月	毎日新聞社	第16回「日韓国際環境賞」
2011年2月	共同通信社・地方新聞46紙	第1回地域再生大賞「大賞」

【主な選定歴】

年月	選定者	選定名	選定対象
2006年2月	農林水産省	疎水百選	源兵衛川
2008年6月	環境省	平成の名水百選	源兵衛川
2010年2月	三島商工会議所	三島ブランド	源兵衛川
2010年3月	農林水産省	ため池百選	中郷温水池
2010年9月	三島商工会議所	三島ブランド	三島梅花藻

【主な活動の成果】

荒地再生・市民手作り公園

- ・ 鎧坂公園（1993 年～）
雑草が生い茂っていた約 40 坪の空き地を、子ども会をはじめ多くの住民グループの一斉作業でポケットパークを整備
- ・ 沢地グローバルガーデン（1993 年～）
民間レベルの国際交流を実践する地域のグループが主体となって整備・維持管理する「交流の場」
- ・ みどり野ふれあいの園（1994 年～）
雑草が伸び放題だった市の遊休地が、町内会や子ども会の皆さんと企業の協力で素敵な公園に



（鎧坂公園）

地域の宝物再生

- ・ 三島梅花藻の里と水神さん（1995 年～）
冷たいきれいな湧水でしか育たない水中花ミシマバイカモ。一時期市内では絶滅したが、その再生基地を整備
- ・ 雷井戸（1996 年～）
江戸時代からある市内最大の井戸。かつては簡易水道の水源だったが使用放棄されてしまった井戸の再生
- ・ 腰切不動尊と古井戸（1999 年～）
忘れ去られようとしていた不動尊をお祭りの復活や裏手にあった古井戸の整備を行い、地域の宝物として再生



（三島梅花藻の里）

自然環境保全・再生

- ・ 境川・清住緑地（1999 年～）
貴重な自然環境が残されている広大な遊水池（約 85ha）を対象とした大ビオトープ公園の整備をコーディネート
- ・ 宮さんの川・ほたるの里（2004 年～）
市民の手によって景観整備・維持管理がされている「宮さんの川」上流にほたるの里づくりをパートナーシップで実施
- ・ 松毛川周辺自然再生（2003 年～）
自然再生事業のモデルとして河川環境の再生、「千年の森づくり」に取り組む。ホテイアオイの除去作業や河畔林保全活動を実施



（境川・清住緑地）

学校ビオトープ・環境教育

- ・ 長伏小学校ビオトープ（1999 年～）
人工芝の中庭を子どもたちの環境教育の場となるビオトープに。児童、先生、PTA と地元企業との連携で素晴らしい空間に
- ・ 函南さくら保育園ビオトープ（2004 年～）
保育園に隣接する遊休地を活用し、園児も参加して「遊べる自然の場」となるビオトープを整備
- ・ 鎮守の森探検隊（2002 年～）
三島に点在する多くの鎮守の森をフィールドに地域の親子を対象にした環境学習プログラムを開催



（函南さくら保育園ビオトープ）

環境コミュニティ・ビジネス

- ・ せせらぎシニア元気工房（2003 年～）
シニア有志が中心となって間伐材や放置竹林の青竹などを活用した製品開発
- ・ 三島うみやあもん屋台（2003 年～）
街のにぎわい再生を目指して、屋台を製作し、それを活用した商品販売。中心商店街のイベントなどで活躍
- ・ そばつくり隊（2004 年～）
箱根西麓の遊休農地を地元農家と協働で利活用、そばを栽培。地場野菜等の栽培も進め、三島ブランドの開発と地産地消を促進



（そばつくり隊）